

(二) フランス・パリでの絵巻ワークショップの開催について

立教大学とフランス国立東洋言語文化研究所 (INALCO) は、大学間協定を結んだ協定校の関係にある。日本文学専修でも、これまで留学生の受け入れや教員の派遣・招聘、シンポジウムの開催など、さまざまな形で学術交流を続けてきた。

二〇一六年六月、鈴木彰が、パリのコレージュ・ド・フランスにて開催された国際シンポジウム「HEROGLOSSIE II : Les textes fondateurs」に報告者として招聘される機会があった。その滞在期間に合わせて、二〇一四年にフランス国立図書館 (BnF) の所蔵品となった『八幡の本地』絵巻 (全一巻) についてのワークショップの開催を INALCO の Estelle Leggeri = Bauer 教授に打診したところ、BnF の司書 Veronique Beranger 氏とすばやく協議、調整を進めてくださり、六月六日 (月) に実現することができた。以下、その件について、簡潔に報告しておく。

前年一月二十六日と三月十六日に、鈴木は同図書館にて当該絵巻を閲覧させていただいており、その後、手写しておいた詞書について少しずつ分析を進めていた。閲覧に際しては、エステル・レジェリー = ポエール教授から多くのご教示をいただいたのだが、氏は日本美術史が専門で、この絵巻の絵画的特徴・意義について早く注目されていて、古絵巻からの多くの影響関係を発見するなど、注目すべき画像分析を蓄積されつつあった。こうした経緯をふまえて、今回はそれぞれの成果を持ち寄り、パリで日本の古

典文学や美術史、歴史などを学ぶ研究者・院生・学生と意見交換することを目的とする場を設けることとしたのである。また、準備を進めるうちに、当該絵巻とあわせて、同図書館所蔵の「酒呑童子絵巻」も併せて視野にいれ、その作風の違いや絵巻としての特徴について検討する場になった。絵巻の閲覧・利用について、ヴェロニック・ペランジェ氏の多大なるご協力があったことはいうまでもない。

当日のワークショップは、「武家絵巻の世界へ——『八幡の本地絵巻』と『酒呑童子絵巻』をひもとく——」と題し、立教大学文学部文学科日本文学専修・BnF・CEJ/Inalco 共催の形で行われ、延べ二十名ほどの参加者があった。

プログラムは二部構成で、前半は十時から十三時まで、BNF の会議室 (Salle des Commissions BnF) につき、「八幡の本地絵巻」と「酒呑童子絵巻」の原資料を参加者全員で閲覧した。まず、ペランジェ氏が当該絵巻の書誌情報などについて、配付資料をもとにいていねいに概説してください、鈴木が絵巻の書誌調査をおこなう際の要点や留意点について補足した。その上で、全巻にわたって、詞書・筆跡・絵・装丁・料紙などの様相を点検していった。午後の部で話題となる事柄などを例として、要所で、写真ではわからない事柄への注意をうながし、現物資料と向き合うことの意義について確認した。時が経つにつれて、参加者それぞれが自分の専門分野の知見を説明しあうといった局面も出てきた。与えられた閲覧時間を最大限に利用して、両絵巻のすばらしさを再発見し、その魅力を堪能することができた。

午後は、会場を INALCO 本館内 (Salle des Plaquets Inalco)

に移し、鈴木が

「八幡の本地絵巻」の詞書全文の翻刻と釈文（暫定版）を配布し、各場面ごとに詞書の内容をひとつひとつ紹介したうえで、他の『八幡の本地』諸本とBnF本との本文面の違いがどこにあるのか、BnF本の詞書はどのような位置にあるものなのか、BnF本の詞書と挿絵との対応関係等につ

過ごすことができた。

今回のワークショップを通して、当該絵巻がもつ文化的価値について、一同が深く再認識することとなった。今回の学術交流が、日本の古典籍がもつ意義や価値を多方向から見つめ、その成果を共有していく機会のひとつとなりえたと思えば幸いである。

ワークショップの当日、昼食時や移動中、あるいは終了後の会話で、INALCOで日本学を学ぶ学生・院生たちが置かれている状況や、院生・学生たちの将来への希望や展望などについて、さまざまな話を聞くことができた。そのなかには、立教大学を含めて日本の大学に留学した経験をもつ人や、これから日本への留学を希望している人のことばも含まれている。すべてが、今後の国際交流のありかたを模索するための貴重な声であった。

なお、冒頭で記したCollege de Franceでの国際シンポジウムは、右のワークショップの二日後の八日（水）に開催された。会場には、INALCOや同じく立教大学と協定関係にあるパリ第七大学からも多くの方々が参加していた。私は『Le Heike monogatari』／平家物語——再生する物語と源泉としてのテクスト——と題して日本語で報告したが、会場には日本語（古典を含めて）を深く理解する方々が多数参加しており、何よりもフォーリ・ジュリアン氏の名通訳のおかげで、深みのある議論をすることができたことを、感謝の意とともに附記しておきたい。

末筆ながら、このワークショップの企画に協力してくださったINALCOとBnFの関係者各位、とりわけエステル・レジエリー＝ポエール氏とヴェロニック・ペランジェ氏に、心よりお礼申し上げます。

（文責・鈴木 彰）

いて解説を加えた。また、随時、エステル・レジエリー＝ポエール氏が図像面での特質や詞書筆者の問題（朝倉重賢筆とみられること）について、参考図版をPPTで提示しながら的確に解説した。この午後の部は、十四時三十分からの三時間を予定していたが、途中一度の休憩を挟んで、予定していた時間をこえて質疑応答が続けられた。その過程ではいくつもの新たな検討問題が浮上してきたこともあり、心地よい疲労感を感じながら、充実した時間を